

# 対人感情に関する研究

——対人間距離測度からの実験的検討——

藤原正光・中澤則子・稲越孝雄

## The Study of Interpersonal Affection

——the experimental study of interpersonal distance——

Masamitsu Fujiwara, Noriko Nakazawa, Takao Inakoshi

### 目 的

人が情緒的に不安な状況におかれた時の行動様式についての研究は、これまで心理学のさまざまな領域で検討されてきた。たとえば、interpersonal attractionの領域で、不安や恐怖と親和性や依存性との関係は、Schachter, S. (1959), Gerard, H. B. (1963),<sup>(1)</sup> Zimbardo, P. G. & Formica, R. (1963)<sup>(2)</sup>以降数多く研究されてきている。また、GS Rや心拍を指標とした生理学的研究も数多く発表されている。

しかしながら、近年、感情をどのような測度で検討したらよいかという測定法上の問題が、対人認知の領域を中心におこってきた。

田崎 (1971)<sup>(4)</sup>は、従来なされてきた、質問紙法などの言語表現に基づく研究法に対して「意識された感情を言語表現によって測定することには限界がある。つまり、感情は意識することによってコントロール可能であり、言語表現それ自体が意識測定上の歪みを生じさせる」と述べ、対人感情を測る1つの測度として対人間距離尺度を用いることの有効性を主張している。

Smith, G. H. (1953)<sup>(5)</sup>は「size distance

table」という装置を考察し、自分の好む大きさに、好意的感情を抱いている者の写真と非好意的感情を抱いている者の写真を調整させたところ、好意的感情を抱いている者の写真をより大きく調整するという結果を見出した。

また、Tsuji, S. & Kato, N. (1966)<sup>(6)</sup>は、幼稚園児に、両親のどちらをより好きな対象として選択するかを、写真の定位場所を測度として検討したところ、好きな親の方を自分の近くに定位する傾向がある、という結果を見出した。

田崎 (1972)<sup>(7)</sup>は、box型の距離測定装置を考察し、ヘビ、ウサギ、小鳥などの小動物に対してどの程度の好悪感情を抱いているかを被験者からの距離を測度として検討したところ、好きな対象を近くに定位するとの結果を得ている。

さて、このような対人間距離を測度とした研究から得られた、好意を抱いている対象は自分により近く、嫌いな対象はより遠くに定位させるという諸研究結果は、被験者をさらに情緒的に不安な状況に置いた時、どのような変化をもたらすであろうか。

日常場面での観察結果からは、好意を抱い

ている対象（たとえば、幼児にとって母親）への高い接近傾向、つまり、短い対人間距離（幼児と母親との間に）が予想される。これは情緒的不安定な状況での幼児の母親への依存要求の喚起として説明できよう。依存性との関係についての実験的検討はSchachter, S. (1959) らによってなされている。

本研究のおもな目的は、情緒的に不安定な状況下での対人感情を対人間距離を測度として以下の作業仮説を検証することにある。

①情緒的不安感の程度：情緒的に不安な状況下での行動様式は、安定した状況下と比べより顕著な形で表出されるだろう。したがって、情緒的な不安感 は行動レベルの測度である対人間距離にも何らかの影響をおよぼすだろう。

②対人感情(好き-嫌い)：好意を抱いている対象は、嫌悪感を抱いている対象よりも短い対人間距離をとるであろう。

③性差：わが国の文化的背景から現象的に推測すると、女性の方が感情をよりストレートに表出する傾向が高いと考えられる。したがって、対人間距離にも大きな測度上のズレが表出されると思われる。

④上向系列と下向系列：自己を反映している対象（定点対象）への接近方向は、被験者からみて近づく方向（上向系列）と遠ざかる方向（下向系列）とが考えられる (Fig. 1)。このような接近の方向が対人間距離に何らかの影響をおよぼすであろう。

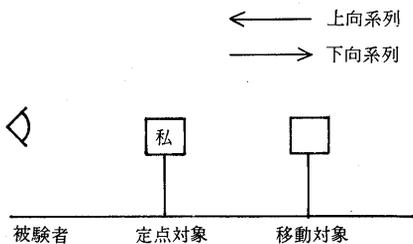


Fig.1 定点対象への接近方向

## 方 法

**被験者：** 本研究で用いた被験者は、大学生、男女それぞれ20名、計40名であった。それぞれの被験者は、情緒的安定感(2)×対人感情(2)×性(2)×上向・下向系列(2)の4元配置法にもとづく実験計画により、あらかじめ実験前に設定された各細胞 (cell) に5人ずつ割り当てられた。

**装置：** 田崎 (1971, '72) が考案した装置をもとに、多少改良を加えた (Fig. 2)。従来の諸研究では、対人間距離の測定は実際の被験者からの距離で測られていた。しかしながら、本研究では、自己を反映している定点対象からの距離を測度としている。したがって、この方法は一種のプロジェクト (project) 法であると考えられる。定点対象には、5 cm<sup>2</sup>の白地の紙に「私」という字が書かれており、定点対象との間の距離を調整する対象 (移動対象) には、好きな人 (嫌いな人) の名前が書かれていた。定点対象と移動対象との間の距離は移動対象から box 外に出ている指示棒と、box に貼ってあるメジャーで知ることができた。

**手続き：** 上記の4元配置法にもとずき各細胞に割り当てられた被験者は、①アナグラム作業、②好きな人 (嫌いな人) のプロフィール評定、③対人間距離測定、④ポスト・テスト、の順序でそれぞれの課題を遂行した。

1) アナグラム作業 (作業制限時間3分) は、

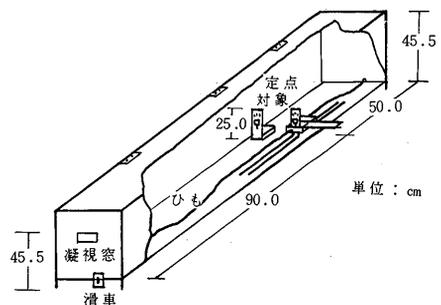


Fig.2 距離測定装置

寺岡 (1959)<sup>(8)</sup> にもとずき作成した橘・子安 (1978)<sup>(9)</sup> のアナグラム表 (Table. 1) に準拠した。この作業は無意味な綴りを入れかえ有意味な単語を作成する作業である。実際には、制限時間内に作業を終了させることは不可能な課題である。情緒的な不安感は、「この作

業はあなたの知能の一部を測定するために行います。」という教示により喚起させた。低不安感群にはこの作業は実施されなかった。  
2) Osgood, C. E. (1962) の S. D 法 (Semantic differential method) に準拠した好きな人 (嫌いな人) のプロフィール評定 (Fig. 3) は、好きな人 (嫌いな人) に対する感情を喚起させるとともにこのプロフィールの結果から対人感情を検討する資料を得るために実施された。

Table. 1 アナグラム作業用紙

| 課 題 A |      | 課 題 B |       |
|-------|------|-------|-------|
| ゆよそき  | きかまり | くみしるへ | りおあみの |
| きみりふ  | かまさみ | ふほきまら | ちふけおて |
| けみさの  | もきまの | けのもらつ | かてみそぬ |
| いともう  | そけぬこ | たいほしけ | そとかきり |
| みはつち  | りまかさ | にないまき | つにそきう |
| またない  | やもしけ | うめあらき | なしかみひ |
| めいたき  | さこいろ | よはまらき | つもたげま |
| おやきは  | りしゆら | りのゆえか | かにあおむ |
| ねりむい  | ちつきお | すのやけも | れこげかし |
| まぬいや  | のもりし | くうそちろ | もろかきち |
| りのきま  | けのたこ | にあはれこ | きえらまは |
| たつしく  | はさるめ | ひかりみそ | いわぬめく |
| すりやく  | せほうき | おいむしろ | ちねえがも |
| みらくや  | そたくへ | けとそやあ | さいつあわ |
| くうふる  | のきいも | おねほりせ | りゆむとし |

3) 対人間距離測定は、対人間距離測定装置により実施 (Fig. 2)。被験者は、第1回目は上向系列で、2回目は下向系列で、……というように、相互に、好きな (嫌いな) 人の名前の書いてある移動対象をできる限り定点対象に近づけるように教示された。各被験者は、3人の他者について上向・下向系列で、計6試行実施した。

4) ポスト・テスト：質問紙形式で、①実験目的の推測、②アナグラム・テスト作業時の気分、③対人間距離測定時の気分、などへの回答を求めた。これらの資料は結果の分析の際の補助資料とした。

測 度： 結果の分析の際、用いられた測度は、定点対象と移動対象との間の距離の絶対値であった。

## 結 果

### I 対人間距離からの分析結果

4要因の分散分析の結果、対人感情要因、性要因に有意な主効果が見い出されたが、情緒的安定感、上・下向系列要因には統計的な有意差は認められなかった。また、いずれの要因間にも有意な交互作用は見い出されなかった (Table. 2)。したがって、統計的に有意差の認められた要因である対人感情・性要因と対人間距離との関係について検討しよう。

1) 対人感情と対人間距離： 好意的な感情を抱いている他者 (移動対象) と私 (定点対象) との間の対人間距離は、嫌悪感情を抱

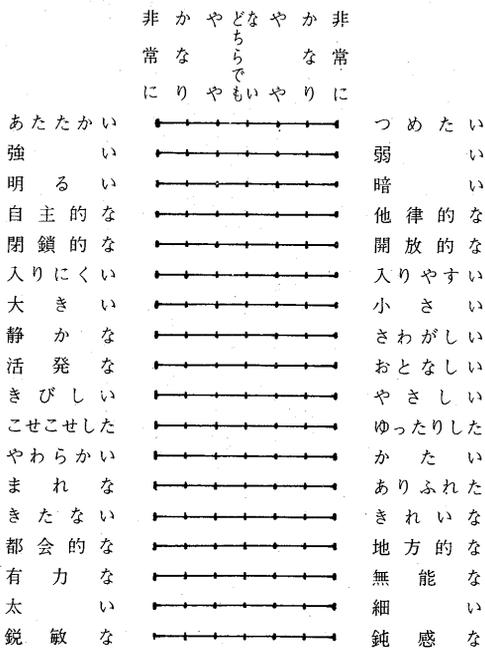


Fig. 3 プロフィール評定用紙

Table. 2 対人間距離におよぼす4要因  
(情緒的不安感×対人感情×  
性×系列)の効果

| 変動因           | 平方和      | 自由度 | 平均平方和 | F 値   |
|---------------|----------|-----|-------|-------|
| 情緒的不安(A)      | 18.48    | 1   | 18.48 | 2.56  |
| 対人感情(B)       | 30.53    | 1   | 30.53 | 4.23* |
| 性(C)          | 31.97    | 1   | 31.97 | 4.43* |
| 上・下系列(D)      | 6.80     | 1   | 6.80  | —     |
| A × B         | 20.53    | 1   | 20.53 | 2.85  |
| A × C         | 1.84     | 1   | 1.84  | —     |
| A × D         | 3.50     | 1   | 3.50  | —     |
| B × C         | 15.81    | 1   | 15.81 | 2.19  |
| B × D         | 0.19     | 1   | 0.19  | —     |
| C × D         | 0.13     | 1   | 0.13  | —     |
| A × B × C     | 4.22     | 1   | 4.22  | —     |
| A × B × D     | 0.59     | 1   | 0.59  | —     |
| A × C × D     | 0.04     | 1   | 0.04  | —     |
| B × C × D     | 0.18     | 1   | 0.18  | —     |
| A × B × C × D | 0.29     | 1   | 0.29  | —     |
| 誤差            | 1,615.38 | 224 | 7.21  | —     |

\* P < .05

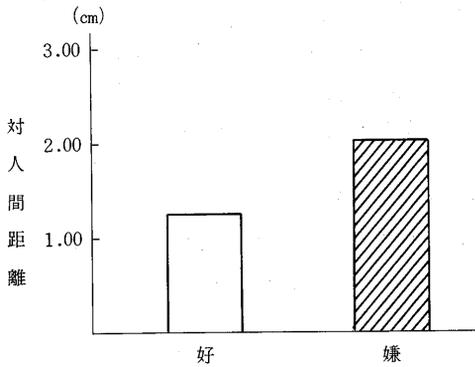


Fig. 4 対人感情と対人間距離

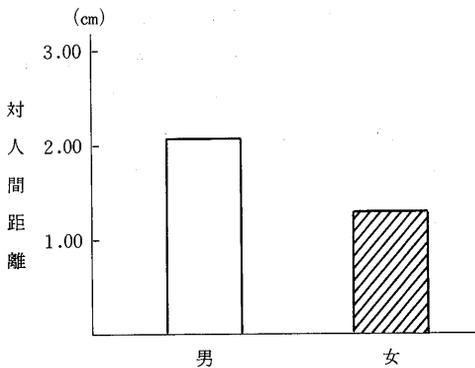


Fig. 5 性差と対人間距離

いている他者と私との間の距離よりも有意に短い、という結果が得られた (Table. 2, Fig. 4).

2) 性差と対人間距離: 男子に比べ女子の方が、他者と私との間の対人間距離を有意に短くとする傾向のあることが見出された (Table. 2, Fig. 5).

## II プロフィール評定からの分析結果

対人間距離測定結果の分析で統計的に有意差の認められた対人感情と性差要因についてマトリックスを作成し、それぞれの細胞ごと、対人間距離の長い者3名(上位群), 短い者3名(下位群)を選出し、プロフィール評定結果の分析対象とした (Table. 3).

Table. 3 プロフィール評定結果の分析対象とした被験者

| 要因   | 対人感情 | 性     |       |
|------|------|-------|-------|
|      |      | 男子    | 女子    |
| 対人感情 | 好    | 3 (3) | 3 (3) |
|      | 嫌    | 3 (3) | 3 (3) |

( ) 下位群

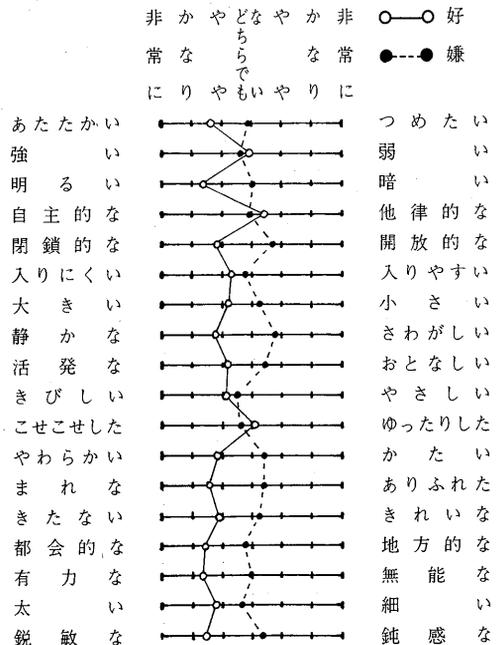


Fig. 6 対人感情(好き-嫌い)とプロフィール評定

お、結果の処理の際、各形容詞対を-3~+3で便宜的に数量化した。

性差、対人感情、対人間距離の程度（上位群対下位群）らの要因をそれぞれ独立にプロフィール評定結果から分析したところ、対人感情にのみ、いくつかの形容詞対で有意差が認められた（Fig. 6）。

## 考 察

### I 対人間距離からの考察

1) 対人感情と対人間距離：好意的な感情を抱いている他者の方を嫌悪感情を抱いている他者よりも、自己の近くに定位する傾向があるとする結果は、従来の知見を支持するものである。

また、これまでの対人間距離の測定方法とは異なる一種のプロジェク法法といえる技法（被験者から移動対象までの距離ではなく、box内の定点対象と移動対象との距離を測度とした）で、このような結果が得られた点は一応、注目すべきであると思われる。この結果は、人の日常行動を現象的に観察しても妥当なものであると思われる。

2) 性差と対人間距離：男子に比べ女子の方が対人間距離を短くする傾向の高いとする結果は、一般に、女子には高い依存要求や親和要求が存在するという知見からは納得できる結果であるといえよう。本研究結果では、性差×情緒の安定性、性差×対人感情、のいずれにも有意な交互作用が認められていない。したがって、情緒的に不安な状況での耐性、感情表出のコントロールなどを性要因から検討できないのは残念である。詳しい検討は今後の課題となろう。

### II プロフィール評定からの考察

S. D法に準拠したプロフィール評定は、対人感情への対人間距離測度からのアプローチを従来の研究方法（言語反応を測度とした研究法）で補足しようとする意図で導入された。

プロフィール評定と性、対人感情、対人間距離の要因との関係について、それぞれ独立に検討した結果、対人感情要因で、いくつかの形容詞対に有意差の認められた結果は従来の知見から十分納得できるが、対人間距離の要因では、いずれの形容詞対にも有意差が認められなかった結果は実験計画も合わせて今後に残された課題となろう。

対人感情要因について得られた結果は、①人の好き一嫌いの感情は、S. D法的な技法での検討がかなり有効であり、②対人感情は、従来の知見をほぼ支持するものであると結論できよう。

### III 今後に残されたおもな課題

結果の解釈上今後に残された課題はいくつかあるが、おもな課題は、①情緒的安定性の要因が対人間距離に有意な効果をもたらさなかった点、②対人間距離測定方法上の問題点、とにある。もち論、①と②とは相互に密接に関連している問題である。

情緒的不安感の程度に有意差が認められなかった点は、①アナグラム作業が対人感情に影響をおよぼし、さらに対人間距離測定に作用するほどには強い情緒的不安感を惹き起さなかったのか、②アナグラム作業という課題性質上、情緒的不安感を直接、対人間距離測定に反映できないのか、③情緒的不安感は、本来感情レベルに作用するものであり、対人間距離測定という行動レベルには反映されにくいのか、の原因によると考えられる。ポスト・テストでアナグラム作業に対する印象を求めた回答結果では、「ややいらした」、「いらした」の項目を選択した被験者が、男子90%、女子70%、に達していた。この結果から、②ないしは③、または、②・③の交互作用によるものと考えられる。これらは、実験計画の再検討を含め、今後の課題としたい。

対人間距離測定の方法上の問題は、本研究で使用したプロジェクト法的な技法が、従来

の技法(田崎, (1971, '72) らが用いた技法)と比べて十分有効であるかどうかの問題である。本研究での技法は、定点対象には「自己」がプロジェクトされ、移動対象には「他者」がプロジェクトされており、いずれの対象もプロジェクトされているという点で比較対象上は等価であると考え、従来の、本来の被験者とプロジェクトされた他者の比較よりも、より妥当性の高い技法であると思える。しかし、両技法の詳しい実験的な検討は今後の課題となろう。

## 要 約

人が情緒的に不安な状況下に置かれた時の対人感情(好き-嫌い)について対人間距離を測度として検討することをおもな目的とした。

対人間距離に影響をおよぼすと思われる、①情緒的不安感の程度、②対人感情、③性差、④上向・下向系列、の4要因について検討した。

なお、被験者は大学生、男女それぞれ20名、計40名であり、実験手続きは、①情緒的不安感を喚起させるためにアナグラム作業を実施し、②対人感情の評定としてプロフィール評定(S.D法に準拠)を行い、③対人間距離測定としてbox型の対人間距離測定装置(田崎, 1971, '72)を用いた。

4要因の分散分析の結果、対人感情要因、性要因に有意な主効果が見い出され、①好きな他者と自己との対人間距離は嫌いな他者よりも短く定位され、②女子の方が短い対人間距離をとる、という結果がえられた。

プロフィール評定では、対人感情に有意な従来の知見を支持する結果が得られたが、対人間距離測度との間には有意な関係は見い出されなかった。

今後のおもな課題として、①情緒的安定性の要因を実験条件に組み入れる際の実験計画上の問題、②対人間距離測定の方法上の問題

が残った。

注1 本研究は文部省科学研究費(課題番号34008;代表者 水島恵一)より一部の援助を受けた。

注2 本稿の文責は藤原正光にある。さまざまな問題点をご指摘いただければ幸いです。(連絡場所:343 越谷市南荻島3337 文教大学教育学部教職研究室 Tel.0489(74)8811(内314))

## 引用文献

- 1) Schachter, S. 1959 The psychology of affiliation. Stanford Univ. Press.
- 2) Gerard, H. B. 1963 Emotional uncertainty and social comparison. J. Abnorm. & Soci. Psychol. 66 568-573.
- 3) Zimbardo, P.G. & Formica, R. 1963 Emotional comparison and self-esteem as determinants of affiliation. J. personality, 31, 141-162.
- 4) Osgood, C. E. 1962 Studies on the generality of the affective meaning systems. American Psychologist, 17, 10-28.
- 5) Smith, G.H. 1953 Size-distance judgements of human face. J. general psychol. 49, 45-64.
- 6) Tsuji, S. & Kato, N. 1966 Some investigations of parental preference in early childhood Jap. psychol. Research, 8, (1), 10-17.
- 7) 田崎敏昭 1972 距離知覚判断による対リーダー対作品への感情負荷の検討. 実社研, 12, 1, 20-26.
- 8) 寺岡 隆 1959 アナグラムの解読に及ぼす配列および材料語の影響, 心研 30, 4, 11-19.
- 9) 橋 良治・子安増生 1978 達成動機づけとアナグラム解決課題の関係について. 教心研, 26, 4, 34-38.